

---

# 東方神隠し

キャットマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方神隠し

### 【Nコード】

N0166M

### 【作者名】

キャットマン

### 【あらすじ】

神隠し。それは山が何かを隠してしまうこと。人間は山を畏怖し畏敬した。そしてその思いが一人の神であり、妖怪であるものを生み出した。神すらも隠してしまう神隠し。それを恐れた神々に封印されてしまった。しかし長い長い年月と共に封印は緩んでいった。そしてついに封印は解かれた。

長い封印により失った記憶を取り戻すために、暮らしていく。

## 第零話（前書き）

初めましてキャットマンです。

今回が処女作となります。

オリ主で、原作準拠な点はほとんどないと思います。

作者は原作の知識はかなり乏しいです。ほとんどは二次小説で得た知識です。　そういうのは無理。と思う方は『戻る』を押してください。

それでも大丈夫。という方はどうか読んでやってください。  
よろしく願います。

## 第零話

神隠し

それは人々の自然に対する畏怖、畏敬から生まれた。

山や森に入った人が、忽然と消えうせる。

山や森は異界に通じるといわれ、消えた人々は皆、異界に行ってしまったと思われた。

それは異界へと通じる道に迷いこむこと。

神隠しは何も人に限った話ではなかった。

神隠しは神すらも迷ってしまった。

迷ってしまった道の名は神籬。

神籬は異界と現世の端境、結界

そこは全てに等しい世界へと送る道。

道の先には何もない世界。

ただ真つ白の世界。

全てを包み込み、白く消してしまう世界。

出入りできる者は、神籬に住まう神であり、妖怪である異端な案内人のみ。案内人は山に迷いこんでしまった者を、怒りに触れてしまった者を等しく神籬に送り、その先に案内してしまう。

なぜならそれが存在理由だから。

太古の神々、人々は恐怖した。

死後の世界ではない。まったく異質な世界に送る案内人を。

そして拒否した。存在させることを。

しかし、それを存在を消すことはできなかった。

なぜならそれは、人が想い、畏れ、敬っている山そのものであったから。

神の力を持っても打ち滅ぼすことはできず、道に迷ってしまう。しかし神々は諦めなかった。

倒せないなら、封じればいい。

神々は現世との道を封じた。

案内人は神籬に封じられた。案内人は抵抗をしなかった。

あくまでも山の案内人。

山に対して害をなさないのであれば、それは排除すべきものではない。

案内人は拒まない。拒否をしない。

案内を頼むならば、案内をし、拒むなら何もせず、道に迷うものをただ傍観するだけ。

通じる道が無いのならば、案内すべき者がいないのであれば、ただそこで待つだけである。

再び道が通じるのを。

案内すべき者がやってくるのを。

記憶を失いながらも、案内人は眠りについた。

これにて神隠しは終わった。そう思われた。

神々にとつての神隠しは終わった。しかし人々の神隠しは終わっていないかった。

山への畏怖は新たなものを、生み出してしまう。

生み出された物は天狗、鬼、化狐など妖怪となり、人間を山や、里に降りて襲う。

人間は過去に起きた神隠しを忘れ、新たな神隠しを恐れ、新たな神を望む。封印を施した神々の役目を忘却し、信仰を失い消えてゆく。

そして誰もが気づかないうちに、再び道は繋がりはじめた。

神々が消えて、道を閉ざしていた門の門が外れはじめ、門は開きかけ、案内人の眠りは覚め始めていた。

通りゃんせ 通りゃんせ

ここはどここの 細通じゃ

天神さまの 細道じゃ

ちつと通して 下しやんせ  
御用のないもの 通しやせぬ  
この子の七つの お祝いに  
お札を納めに まいります  
行きはよいよい 帰りはこわい  
こわいながらも  
通りやんせ 通りやんせ

## 第零話（後書き）

反省はしてる。そして後悔もしてる！

## 第壱話

緑に覆われた世界。

世界の中心に巨大な楠が鎮座している。

楠には注連縄が巻かれ、その中心にはボロボロになった、『封』と書かれた札が貼られていた。

楠を中心に、榊が周りを囲み、鳥居が四方に立ち、鳥居の先に続く道は白い靄によってなのか、ぼやけて先を見通すことはできなかった。

その世界の中に一人、楠に寄りかかるものがいた。

薄い緑色の着物を着て、中性な顔立ちであり、傍目は男のようであった。

「んっ」

それは体を震わし、眼を開けた。

寝ぼけ眼をこすりながら周りを見渡す。

「さて、ここはどこだい？」

言葉の深刻さに比べて、表情に悩みは一切なかった。

むしろ我が家にいるかのごとくの表情であった。

おもむろに立ち上がると、正面の鳥居から先の道を目指して歩き始めた。

道の先は白い靄が、手を伸ばせば手が見えなくなるほどに覆いつくしていた。

しかしそれは一切の迷いもなく、ただ真っ直ぐに歩き続けた。いつの間にか道と森を区切っていた榊は消え去り、その後ろの木々も白い靄に包まれていた。全てが白に染まる世界。

その中を、それは首を傾げながらも、一切不安げな様子を見せず歩き続けた。

「ここを歩いたような気がするけど、いつのことでしょうかね」  
常人なら気が狂ってもおかしくなくくらいに、何もない世界。



生き物の気配はなく、無音。

自分の足音も、どこかに吸い込まれたかのように消えていく。自分が真っ直ぐ歩いているのかすら、わからなくなる。

常人がそんな世界に長時間いても平静を保てるか？

答えは否だろう。

そんな中それは、平然と歩き続けていた。

長い間歩き続け、気づいたら再び榊が生い茂る道を歩いていた。

うつすらと見える枝分かれした道全てを知ってるかのごとく、分かれ道を迷いなく選んでいく。

道の終点は、最初の広場だった。

鳥居をくぐった先は、注連縄が巻かれ、札が貼られた楠があった。どうやらぐるりと一周してしまっただけらしい。

「やっぱりここ、知ってる気がする」

それは楠を眺めて呟く。

自分の記憶との齟齬に混乱しながら、楠の下に歩み寄り見上げる。

楠は巨大で、葉が生い茂り、頂点は見ることにはできそうになかった。

楠はまるで、あらゆるものを包み込むがごとく雄大だった。

葉が擦れる音は心地よく、幹から香る匂いは体を暖かく包み込んでいた。

楠の雄大さにそれは母のような暖かさ、父のような雄大さを感じ、幹に抱きついた。

その瞬間、ボロボロだった札が剥がれ落ちた。

札が楠が剥がれ落ちた時、光がそれを包み込んだ。

それは光を感じると、眼をつむり、さらに強く楠に抱きついた。

光は広場全体を覆っていた。

そして光が消えた時には誰も居なくなっていた。

ただ葉が擦れあう音だけが響いていた。

山の麓には大きな神社が建っていた。

その神社の名は洩矢神社。

ミジャクジを束ねている、山の神を信仰している。

そこでは、その山の神を中心とした王国が存在していた。

その日、信仰の対象である山の神諏訪子は、神社の奥の間にて、お気に入りの帽子を深くかぶり、顔を隠して眠っていた。

その姿は子供の体と合わさって、神の威信はまるでなかった。

諏訪子の横では、巫女服姿の女性が侍っていた。

暖かな陽気に逆らわずに、惰眠を貪っていた。 いやー春だ

ねえ。この麗らかな陽気。しまなきや損というもんだね。

窓から差し込む光を浴びて、うたた寝を楽しんでいた。

しかし、春の陽気を忘れるほどの異質な空気が、諏訪子の体を通り抜けていった。

諏訪子は文字通り飛び起きた。

両手を床について、まるで蛙のような座りかたをしながら、窓の

先に広がる山の奥を見つめていた。

「諏訪子様？ いかがしました？」

諏訪子の動きに驚いた巫女が聞いてくるが、諏訪子の耳には入っていなかった。

諏訪子は瞬きもせずに、山を見つめていた。

なんだい今のは？ いきなり山の中から流れてきたよ。妖怪

？ 確かに妖気はするけど、それはいつものことだしなあ。

「ねえ巫女さん。あの山の先に何があるかしってる？」

諏訪子は窓の先に広がる山の奥を指差した。

諏訪子が人に対して質問するのは珍しくない。子供らしい容姿の為か、好奇心旺盛でわからないことを何でも質問している。

しかし山のことにすることはなかった。

諏訪子は山の神であり、山のことなら人間が知りうるこのできないことを全て知っている存在なのだから。

「あそこまで深いところまでとなりますと、入ったものはいないかと。なにより諏訪子様が一番ご存知かと」

巫女は指さされた山を見つめながら応える。

この答えは当然である。

妖怪がいる山に、不用意に奥深く入ることを禁じているのは諏訪子なのだから。

「あははは、そういえばそうだったねえ」

諏訪子は山の神として、山の事を把握することができる。

しかし、謎の空気を発している場所は何もわからなかった。

ただ、気圧差がある扉が開いたのように、ある場所から勢いよく流れてきていることだけはわかった。

やれやれ。面倒なことはきらいなんだけどねえ。

溜息をつきながら、再び山の奥を見つめ続けた。

そんな諏訪子を、巫女は不思議そうに見ていた。

## 第壱話（後書き）

原作キャラがあらわれた！  
作者は混乱している。

## 第貳話

光に包まれている間、緑色の着物を着たそれは、懐かしさに包まれていた。

それはとても遠い日のことであることを、頭の片隅でわかっている自分がいることに、それは驚いていた。

自分は過去の記憶を失っているのを理解した。

「まあいずれ思い出すでしょう」

口の中で小さく呟き、光が収まると、閉じていた両目を開いた。そこは光に包まれる前の場所と似ていた。

巨大な楠を中心とした広場。

四方に建てられた鳥居。

長い時間風雨を受けてか、ところどころが崩れ落ちていた。鳥居の先に白い霽はない。

整然と生え揃っていた、榊もなく。木々が乱雑に生え、道と呼べるようなものはなかった。

「さてと。ここは本当にどこだろう」

目覚めた時の場所も忘れてしまったらしく、記憶になかったが、体が覚えていたような気がした。

忘れてしまったこの場所の記憶と、現状が違いすぎるることによって混乱している感じだ。

抱きついていた楠から体を離し、改めて辺りを見渡す。

辺りは木々が生い茂り、周りからは葉の擦れる音の他に、生き物たちの気配が充満していた。

それら皆が、自分を歓迎しているようにそれは感じていた。

相も変わらず、理解できない感覚と記憶の齟齬に多少戸惑うも、不安はなかった。

「？」

草木を踏みしめる音が聞こえた。

それは決して四足歩行の生き物の足音ではなかった。  
走ってるかのような足音は、一直線に近づいてくる。

それは身構えるわけでもなく、ただ自然体のままで、足音聞こえる方向を眺めていた。

草の根を掻き分けて現たのは、子供だった。

幼い顔立ち、小さな体は華奢で弱々しく見える、黒い羽を背に生やした少女だった。

少女は満身創痍であった。

肩で息をして、着ていた服は、枝に引っ掛けたのか、ところどころが破けてる所、焼け焦げている箇所があった。そこから見える肌には、枝で切ったのか赤い線がはしり、火傷していた。背中に生えた羽は、毛羽立ち、焦げたような後があった。

少女は緑色の男にも、女ようにも見えるそれに、眼があった数瞬、驚いたような表情が浮かべたが、それは懇願の表情に変わった

「お願い！ 助け」

その言葉の後で続くであろう言葉は、何か少女にぶつかったのか阻まれてしまった。低い音になり、それと同時に、少女が弾かれたかのように転がった。

突然のことに、それは驚きながら、少女に駆け寄った。

少女の背中の肌は衝撃で変色し、火で炙られたように焼けただけ、生えていた黒い羽の片方が半ばで折れ、力無く垂れ下がっていた。

少女は意識を失ったのか、浅い呼吸を繰り返すだけで、閉じた瞼を開けようとしなかった。

いったい何が、と思いながら、先ほどまで少女が立っていた方向を見た。少女が立っていた方向からは、再び何かが、こちらのほうに歩み寄る足音が聞こえてきた。

足音は先ほどの少女のとは違い、木々を踏みしめながら、こちらに近づいてきているようだった。

「やっと追いついたべ」まったく、まだ餓鬼の天狗のくせに逃げ足だけは速い。でももう無理だべ。ここいらは何故か結界が張られて

壁になって行き止まりだべ」

木々を踏みしめながら現れたのは、頭を上に向けなければ、頭が見えないほど、でかい一つ目巨人であった。

「おろ。お前ら何で結界の内側におるんだべ？ あれ結界がないべ」

巨人は一つ目を器用に動かして、二人を視界に入れた。

「へい姉ちゃん。お前は結界が解けた理由を知らんかい？ この子を飛ばしたのは君かい？」

「私は男だ！ 私は気づいたらここにいたから知らん」

自分でもびつくりの即答であった。目の前にいるのは異質な物。だが恐怖まったくなかった。あるのは驚きと疑問。

そして自分が男であることを始めて自覚した。しかし、自分の名前が思い出せないでいた。

「まあそんなのどうでもいいべ。確かにその餓鬼を飛ばしたのは俺だべ」

「何故そんなことを？」

男は巨人に問いかけた。

男は何故かこの巨人の行動に対して怒りを感じていた。巨人がやっていることは、無力の子供に対して全力で殴りかかっているようであった。

まったく解せないな。なぜ私はここまで怒っているんだ？

このような少女だからか？

男は天狗といわれた少女を見た。少女は相変わらず気絶しているらしく、つらそうに呼吸を繰り返していた。男は拳を強く握りしめ、怒りを心の中で膨らませた。

「なにいつてんだべ、お前。俺たちみたいな下等妖怪が、自分より強い妖力を持つ者を食べて強くなろうとすんのは当然だべ。まあ普通は無理だけど、たまに餓鬼のくせに強いやつがいてな。そいつらを食うんだべ」

巨人は、天狗の少女を指差しながら応えた。

男は巨人の言ったことが、信じられないでいた。自分の目の前にいるのは、妖怪である、目の前の少女が、一つ目の巨人と同類であるといっているのだ。さらに少女の力は巨人より強いが未熟ゆえに、補食の対象となっているのだ。

男は呆然となりながら少女を見ていた。視界の隅に赤い塊が入った瞬間、少女を抱き寄せ、後ろに跳び下がった。

赤い塊は地面に当たると、土を抉りながら爆発した。

飛ばされた土に混じった石が、男目掛けて飛んできたが、石はまるで計ったかのように皮一枚のところを通りすぎていった。

その幸運に感謝しながら、男は少女を抱えたまま、巨人と距離を取った。

「なんでかわすんだべ？」

「危険だとわかってるものに当たらなきゃならんのだ？」

「どうせ、その餓鬼は食うんだから関係ないべ」

巨人は指差しながら言った。

「そういうお前は何だべ？ この森にいるんだからお前も妖怪だろうべ？」

「知らん。記憶がなく私も誰なのか知らないのだ。だからお前が妖怪というなら、きっと私は妖怪なのだろう。だがここを血で汚すのはやめてもらうか。おそらくだがここは私の家だ」

「ならお前は誕生したばかりの妖怪だべ。それに力ない妖怪が何をいつてるべ。弱肉強食。それが妖怪たちの中での決まりだべ」

そう言いながら巨人は手に靄のようなものを集めると再び赤い塊を放った。

男は少女を庇うように背中を向ける。背中にはしる衝撃を歯を食いしばって耐える。

先ほどの少女のように背中中は焼けずに、ただ衝撃がはしっただけであったが、その衝撃だけでかなりの痛みだった。

男は少女を抱えたままでは動けないと悟り、少女を自分の背後に置いた。そしてその少女を庇うように巨人の前に立ち塞がった。



巨人は男のそんな動きが面白いのか、大きな口をいびつな形に歪めた。歪められた口の形は嘲笑であった。

「あほだべお前。お前がするべきは今すぐここから逃げることだべ。でもまあもう逃がさないべ。お前から殺してやるべ。そしてその後にゆっくりあの餓鬼を食うべ」

男はその言葉を聴いた瞬間に動き出した。少女はが背後にいるとかわしたときに当たる可能性があるからだ。

男の動きに合わせて巨人は赤い塊を連射する。

男は小刻みに前後左右に動きながら、塊をかわしながら、接近する。懷まで入り、肘を巨人の腹に叩き込む。

「いつてえなあ！」

言葉の裏腹に利いてる様子はない。巨人は先ほどとまで変わらず塊を放つだけ。男はそれを確実に見切って接近しては拳や脚を叩き込む。

男は困っていた。

敵の攻撃をかわすことはできているが、有効打を与えることができていない。分厚いに肉が壁となつて衝撃を吸収しているのだ。

巨人は自分の攻撃をちょこまか動き、かわされ、懷に入ってくれば効きもしない打撃を繰り返すさら、苛立っていた表情となつていた。

「蠅みたいにちょこまかかわすんでねえ！ もういい先にあの餓鬼だ！」

そういうと巨人は氣絶したままの少女目掛けて腕を振りかぶつた。男の眼には、先ほどまでは比べ物にならないほどの靄が腕に巻きついていていた。

あれはまずい！ と思うと同時に男は少女の壁となるべく駆け出す。

巨人が振り下ろした腕から撃たれたのは巨大な塊だった。今までとは比べ物にならない危機感感じながら、男は少女を庇うために、体を大の字にして立ち塞がった。

「ガハッ！」

男は巨大な塊を受けて尚倒れなかった。脚が振るえ、いつ倒れてもおかしくないが、男は立っていた。

巨人はその姿を見て驚いた表を浮かべた。

「お、おまえ何で立ってられんだべ。俺の一番強い技だべ！」

「その程度の攻撃で倒れるほど、柔な妖怪じゃないってことだろう。見掛け倒しの低級妖怪君」

男は震える両脚で立ちながら、巨人をにらみつけながら馬鹿にした。

「お前ほんとに妖怪だべか？ 妖力が少なくせに妙だべ」

「知るか。先に私を妖怪とってきたのはお前だろうが」

男は震える脚を叱咤しながら立ち続ける。だがもはやそれも限界に近く、気を抜くを倒れてしまいそうだった。

巨人はそんな姿を見てにやりと笑うと、再び腕を振りおろし、巨大な赤い塊を放った。

顔目掛けて飛来する塊を見て男は、まずいと思いながらも男の脚は動くことを拒否した。そして脚は限界を向かえ、膝をついた。

しかし膝をついたため、塊は目標を見失い、男の頭上を通り過ぎ、後ろ鎮座している楠に命中した。

瞬間。

男は心が闇に包まれた。

怒り、怒気、憤怒、怒りが心を包み込んだ。

巨人はそんな男の心にうちの氣づかずに近づいてくる。

「やっと倒れたべ。まったく無駄にしつこいからこうなるんだべ」

巨人は男の頭を掴み上げた。

男は目を瞑り、力無く両腕両脚を垂らしていた。

巨人はそれを見てにやりと笑うと、大きな口を開けて男を口元に運ぶ。

ブチ。肉を引きちぎったような、耳触りな音が響いた。

## 第貳話（後書き）

天狗の少女をオリキャラにするかどうか・・・

## 第参話（前書き）

どうしてこうなった・・・

## 第参話

巨大な楠の広間から遠く離れた山の中。

諏訪子は体に苔をまとわせた猪と向き合っていた。

猪は器用に膝を折り曲げながら、諏訪子に頭を下げた。

「急に呼び出してすまないね」

『諏訪子様のお呼びなのですから、参上しないわけにはいけませんね』

猪は諏訪子の部下である土着神だった。部下の土着神は、森を警邏し、己の主たる諏訪子、信仰してくれる人々に対して、悪意持つものの排除の任を承っていた。

「んゝそんな畏まらなくていいのに」

『そういう訳には参りません』

猪は人語ではなく、ただ鳴いているだけだが、諏訪子は問題なく理解していた。

「むう、まあいいや。今日森に異常あった？」

『異常ですが？ 私は特に。いつも通りでしたが』

「急に変な気配を感じたり、風が降りてこなかったかい？」

『はい。何も』

諏訪子は手を顎の当てて首を傾げる。

それに合わせて諏訪子が被ってる帽子の眼も悩んでいる眼に変化した。

諏訪子が今いる場所は山の奥深くだ。自分が風を感じたのは山を降りた麓の中にある神社の中だったが、風を肌で感じとっていた。

同じ部屋にいた巫女は何も感じ取れなかったので、この猪に期待していたのだ。

しかし、山の奥深くにいたものが、何も感じ取れなかったと言っている矛盾。

山のふもとにいた自分が感じ取れ、山にいた人ではない、神の一

種である土着神が感じ取れなかったのだ。

『あ、一つだけ感じ取れたことがありました。なんか山が喜んでいたらよな感じでしたよ。こんなの初めてです！』

山が喜んでいる。

それは諏訪子も山に入ってから感じ取れるようになった感覚だった。

それは明確な感覚ではない。山には顔も口もないのだから。

だが山の神である諏訪子は山が確かに喜んでいるのを感じ取れていた。

山に着く者には理解できず、山の上、同等の私には理解できる感覚。はじめて感じることできた山の感情？　うー考えるのは苦手なだけどねえ。

帽子を押さえながら山を眺めて諏訪子は嘆息した。帽子の眼もたれ眼になり、どことなく情けなく見える。

何か来る！！

諏訪子は山の変化を敏感に感じ取った。その気配はあの時感じた気配に似ていたが、これには明らかな悪意に似たものが混じっていた。

山は暗いものに包まれた。

傍目は何一つ変わっていない。

山に通ずるものだけが違いを感じ取っていた。

先ほどまでの喜びは消え去り、正から負に移り変わっていた。

憤怒。

山は怒り、木々が怒る。

『す、諏訪子様！？　一体どうなったんですか！？　山が怒ってますよ！？』

猪はでかい図体を支える脚を震わしていた。

諏訪子も初めての体験だった。

山は何も訴えかけてこない。木々の感情は理解することはできても、山は何も言っていないのだ。

山の神である諏訪子は感情が無い、もしくは自分が山の感情であると思っていた。神であり化身でもある自分が。

しかし違った。

山の感情は封じられていたのだ。何重にも、山の神である自分ですら感じ取れないほどに。

今、山の感情を封じていたものは消え去り、そして何者かが山の逆鱗に触れてしまったのだ。

こりや不味いかもね。

諏訪子は山の怒りの矛先である、山頂の向こうに広がっているであろう森を思いながら深いため息をついた。

肉を引きちぎる音。ドサリと何かが落ちる音。

巨人につり下げられた男の耳に確かに聞こえた。

しかし男は、その音が何なのか考えもしなかった。考えなかった。

そして男は相変わらずつられた体制のまま、自分を掴む指を軽く握る。

軽く力を込める。

ブチ ドサリ。

男は巨人の腕から解放され、音もなく着地する。

男は巨人を見る。掴んでいた手の指は3本。反対側の指の数は5本。

巨人は何が起きたのか理解できていないのか茫然とした表情で、千切れた自分の指を見ていた。

「やっぱり見かけ倒しの屑妖怪か」

男は吐き捨てるように言う。

その表情には何も映っていないかった。

「――――！！」

巨人は声をかけられたことによって、ようやく現状を理解した。理解するとともに痛みが襲った。

巨人は千切られた手を押さえながら、地を転がる。

男も現状を理解できないでいた。

自分の意思とは関係なしに体が、口が動く。心は怒りに覆われ、眼の前にある物を壊したくてたまらない。頭に記憶が流れ込もうする。理解できない記憶が頭痛をもたらし、それがさらに苛立ちを倍増させる。

男は巨人に歩みより、軽く、まるで道端の石ころのように蹴り飛ばす。

巨人はまるで石ころのように飛ばされる。

「アガ！」

飛ばされた巨人は、後にある樹木に当たり跳ね返る。巨人は必至の想いで立ち上がろうとするが、再び蹴飛ばされる。

「フフハハハハ」

男は笑いを止められなかった。止めようとしなかった。

眼の前で石ころに転がっているのは、先ほどまでこちらを見下し、痛みつけ、食い殺そうとしていた物だ。

それが今では塵芥のごとく転がっているのだ。

転がり続けようやく止まると、巨人は体を震わしながら立ち上がった。

その眼には恐怖が宿っていた。

男はその眼を見て、再び笑う。

声は広間の中を包み込む。木々はその声に合わせてるかごとく葉を擦らせて、不気味な音を鳴り響かせる。

巨人は葉が擦れるたびに首を左右に動かしだした。

「おい。俺を、私を、我を食うんだろ小童が。後ろにいる餓鬼の天狗を食うんだろ」



口から響く声は、重く、年季を感じさせるような声だった。

しばらく首を左右に動かしていた巨人は、千切れていないほうの手を使って指差す。

「お、おまえは、な、なんだべ！？ なんなんだべ！？」

恐怖に駆られてか、巨人は同じような質問を繰り返す。巨人は狙いもつけずに赤い塊を発射してきた。

狙いもつけずに撃たれた塊はまるで弾幕のように男の正面を覆う。それを見た男は、まるで空気の上に座るかの様に浮き上がった。

脚を組み、男は右手を上にした。

右手を上げると同時に、地に落ちていた葉が舞い上がる。舞い上がった葉はその場で浮遊し、赤い塊にぶつかった。

勝敗は、葉の圧倒的勝利であった。

葉は舞い上がった状態のまま浮遊していた。風が吹くたびにゆらゆらと揺れるが落ちる様子はない。

巨人は突き出した腕をそのままに、固まっていた。

脚は枝が貫き地面と縫いつき、体全体を蔦が這い廻り、徐々に締め付けていた。

「た、助けてくれ。も、もう絶対襲わないべ……………だから」

巨人の命乞いを聞き、男は興ざめたような、いいことを思いついたような不可思議な表情を浮かべた。

「ほう、命乞いか。まあ助けてやらんでもないぞ」

男の言葉に、巨人の顔に希望が浮かぶ。男はその表情を見て、笑みを作る。

「だが君はそんな体でどうするのかね？ 時間が経てば治ると思わないほうがいい……………お前は山の怒りに触れたんだから。山の枝で貫かれた脚はいずれ腐れ落ちるだろう」

男の言葉にあわして、枝がさらに深く突き刺さる。

「そうすればお前はどのようなかな。見たところお前は屑妖怪の中でも中々の力を持ってるようだ、もし脚が腐れ落ちれば餌だな」

その言葉にあわせて、蔦が首を絞める。酸素を奪い、正常な判断

能力を奪う。

「徐々に手脚の先からゆっくりとゆっくりと食われるのを抵抗することもできずに見つめているだけなんだよ」

巨人の顔は酸素不足の為か、それとも己が食われる姿を想像してか、紫色に染めあがっていた。

「そこで君に提案がある。全ては平等な世界へ行きたいと思わないか？ そこは襲われることもなく、己が他を襲う必要もない。何も心配することのない世界」

その言葉に巨人はすぐさまに首を縦に振った。

男は壮絶な笑み浮かべた。とてもうれしいのだ。己の本懐を果たせることが。男は歓喜に満ちた声をあげる。

開門『全て等しき白き世界』

巨人の眼の前に真つ白な光が生まれた。そこから出てくる白い靄が巨人の体を包み込んだ。

白い靄に驚いたが、巨人はすぐさまに幸せそうな顔になった。数瞬後、完全に白い靄に包まれて山から消えた。

「全て等しき白き世界。飢えも死も、あらゆる苦しみの無い世界。動くこともなく、息をすることもない、生き物として生きる必要性の無い世界。そこは神、妖怪、人に差はない」

男は小さく呟いた。顔には笑みが消えていた。

男は天狗の少女を楠の根元まで運ぶと、力尽きたように眠ってしまった。

## 第参話（後書き）

なにこれひどい。

主人公凶暴化。山のことに関することなどでは特に凶暴化します。  
しかし、ここまで凶暴にするつもりはなかった！

感想ありがとうございました！

#### 第四話（前書き）

いまさらですけど原作ってなんだー？

そんな作品ですけど暖かい眼で見teやってください

## 第四話

風が頬を撫で、樹より離れた葉が当たった感触を感じながら男は眼を覚ました。

日は高く昇り、葉の間から光が程よい暖かさとなっている。

横になっていた体を上半身だけ起こして、頑なった体を解すように、首を回し、両腕を前と後ろに回す。回すたびに骨がコキコキと鳴った。

眼を覚まして、男が一番に思い出すのは、さっきの巨人との戦いだった。

途中から記憶が……曖昧になってる。まるで強引に蓋をされてるような。目覚める前の記憶と同じ感じになってる。

巨人の指を引きちぎった後の記憶が曖昧になっていた。

蹴り飛ばしたのはしっかりと、巨人が使ったような能力を使ったのは曖昧に、最後の瞬間。巨人を倒したと思われる時の記憶は一切無くなっていた。

まるで消し去ったかのように。

男はため息をついた。予想外な形ではあったが、記憶が戻ったような気がしたのに、再び記憶を無くしてしまったのには、多少虚しさを感じてしまった。

ため息をついた男は自分の着物を掴む小さな手に気づいた。

小さな手の持ち主は天狗の少女だった。

天狗の少女は小さな体を丸めながら、手だけは器用に男の着物を掴んでいる。

男は少女の怪我の様子を看ようとした。少女は昨日、巨人の攻撃によって背中を焼かれてしまったのだ。

丸くなった少女の背中は、焼けただれたりはしてはいなかったが、背中には赤く火傷したようになっていた。木々で切ったと思われる服の下は、綺麗な白い肌が見えていた。

これが妖怪の力かと思ったが、少女の特徴である美しい毛並みを持つ黒い羽の半身は、毛羽立ち、羽が抜け落ち、半ばで折れて垂れ下がっていた。

そして男はあることに気付いた。

自分の体に一切傷がないことに。

おかしい。昨日巨人が言っていたことが正しいならこの少女のほうが回復速度は速いはずだ。なのに私のほうが速い。何より服に泥もなにも付いてないってどういうこと？

少女は体を震わして、男にさらに抱きつくような形になった。

着物に押し付けたところからは、悪い夢を見ているのか、うめき声をだし、目尻からは小さな雫が着物に染み込んでいった。

男は少女の頭を撫でようとしたが、ギリギリ上で止めてしまった。男は怖かった。

少女の頭を巨人のように潰してしまうそうぞうで。 白い何かに変えてしまいそうぞうで。

「ムウ」

男が撫でるべきか悩んでいると、少女眼を覚ました。

少女は眼を擦りながら辺りを見回して、最後に自分寝ぼけたまま抱きついたままだった男と眼があった。

少女は何回か瞬きを繰り返して、ようやく現状を理解したらしく、顔を真っ赤にしながら、男を弾き飛ばした。

「あやややや。なんですかあなたは！？ 私を食べようとする妖怪の仲間！？ ハッまさか私みたいな少女に興奮する変態ですか！？ この変態妖怪！」

少女は言葉を弾幕のように撃つ。そして少女を中心に旋風が起きる。

「幼女で興奮する妖怪は鬼に蹴られて死ねばいいのです イタ！」

旋風に合わせて飛び上がった少女は、羽ばたこうとしたが、折れた翼は動かず痛みを発し、バランスを崩して地面に墜ちてしま

った。

男は少女から眼が覚めてからの行動の速さに驚いていた。そしてなにより、

『幼女好きの変態』と言われたのが心に響いていた。

私は変態なのか……いや私は決して変態ではない！

言葉が心を抉るあまり、一瞬世界が終わったような想いになったが、少女が地面に墜ちると、我に返って駆け寄った。

「大丈夫ですか？」

男は少女に手を差し伸べた。少女は自分の羽が折れていることによくやく気づいたようだ。

少女は己の羽を恐る恐る触れ、上下に動かそうとする。

羽は力無く垂れ下がるだけで、少女の意志に応えてくれる様子はない。

少女は羽を動かすたびに、目尻に貯まり始めた涙は地面に落ち始め、無表情だった顔は悲しみと痛みで歪み、閉ざされていた何かが決壊したみたいだった。

少女は声に出して泣きじゃくった。

男はそんな少女を見て、ただ無言で頭を撫でた。優しく、少女が泣き止むまで撫で続けた。

不思議と、さっき感じたためらいは一切無かった。

しばらくの間泣き続けた少女は、落ち着きを取り戻し、赤くなつた眼を擦りながら頭を下げた。

「その、ごめんなさい。助けてもらったのにあんなこと言って」

口調はさっきとは違い、一言一言をしっかりと口に出す話かただった。

頭を上げた少女の顔には、申し訳なさと、恥ずかしさが入り混じったような表情となっていた。

「気にしなくていいよ。それより君はなんであの巨人に追われていたんだい？」 その問いに少女は、つらそうに顔をしかめた。

「いや、すまない不躰な質問だったな」

「あややや。違うんですよ。どうやって話したらいいかと悩んでたんですよ」

男の言葉に、少女は慌てたように、前に出した両手をバタバタと動かす。

「私は本当は別の山にいる天狗でした。ですが、その山が突如襲われて」

「襲われた？ さっきの巨人みたいな連中か？」

「わからないのです。私はそこから少し離れた場所にいたから。私はそこから逃げ出して、ここまで来る途中襲われて、そして……」

少女は悲しそうに、自分の意志で動かない羽を優しくさすった。

「あの！ 次は私が質問していいですか？」

空気が重くなるのを感じてか、少女は笑顔を作って、明るい口調で訪ねた。

「私は鴉天狗の射命丸しやめいまる 文あやです」

文と名乗った少女は、男が名乗るのを期待に満ちた眼で見つめてきた。

それに対して男は困っていた。男には記憶がなく、名前がない。

どうしたものかと悩んでいると楠と（眼があった）

楠にはもちろん眼はない。男には楠に語りかけられてる確信があった。

「あの」

「私の名前は 久久能智くくのち 楠くすのだよ。よろしく」

楠は文に向って手をさしだした。

「はい！ よろしくお願いします！」

少女は花のような笑みを浮かべ、楠の手を握った。



二人は手を上下に何度か動かした。

「ククノチさん。聞きたいのですが、どうやってあの巨人を倒したのですか？ 何かの能力ですか？ それとも何か隠された力が！？」

文は掴んだ手を引きよせて、楠に詰め寄った。  
興味を持ったことを明らかにしないと、落ち着かない性格である文にとつて、眼の前にいる楠は興味の塊になっていた。

楠もそのことをすぐに理解した。

「落ち着いて射命丸。ちゃんと応えるから。その前に一つ聞きたいだけ。文の眼から見て私はどんなふうに見える？ 後楠でいいよ。ククノチっていいにくいでしょ」

詰め寄ってきた文を落ち着かせて、少しだけ体を離す。

文の問いかけ前に、一つ楠に気になることがあった。心のしこりのように残っている言葉。

『ほんとに妖怪か？』

楠は自分が妖怪だと思っている。妖力も少ないが感じている。

だが、ほんとに妖怪かと問われると、楠自身首を傾げてしまうような違和感も感じていた。

「私も文でいいですよ。妖怪だと思うよ。妖力は少ないですけど。でもこの辺一体には変な気配がするね」

「変な気配？」

楠は当たりの気配を探るように神経を張り詰めるが、森の生き物以外に感じることはなく、敵意も何もなかった。

文自身もよくわからないのか、しきりに首をひねっていた。

「妖怪の気配に何かを混ぜたような。ん〜！ 言葉ではうまく言えないです」

文は、言葉にできないもどかしさを感じてか、眼を閉じて、歯切れ悪く応えた。

「それじゃ仕方ないね。それじゃ文の質問の応えるね」

楠が言うと、文はさっきまでの悩みは頭のどこかに飛んで行ってしまったように、再び飛びかかってきた。その表情は好奇心の塊に

なっていた。

「まず巨人を倒した時なんだけどね。頭に血が昇ってたせいか、記憶がないんだ」

その応えを聞いた文は、数瞬だけ肩を落としていたが、すぐさまに復活した

「では能力は？」

「まずその能力つてのを教えてほしいんだけど。能力つて何？」

楠の問いに文は驚いた表情を浮かべた。楠の言葉が信じられないようだった。

しかし楠には驚かれた表情を見せられても苦笑するしかない。

楠はつい昨日に目覚めたばかりであり、記憶もなく、妖力にいたっては、巨人との戦いのうちに感覚的に理解しただけであった。

相変わらず記憶の齟齬は感じていた。

「説明不足だったね。私はつい最近目覚めたばかり。君がここに来る少し前だよ」

「あややや、そうだったのですか。それは予想外です」

文はそういつて手を振った。

その瞬間、楠の顔を風が撫でた。

今現在、森にはほとんど風が無く、決して自然に起きた風ではなかった。

楠は驚いた。眼の前の小さい少女が手を軽く振っただけで、肌を感じるほどの風が起きたのだから。

「今のが私の能力です『風を操る程度の能力』です。ですが私はまだ天狗になったばかりの子供なんで、まだ全然使いこなせてないんです」

「妖力は巨人より多いよね。天狗になったばかりって？」

「さっき言いましたけど私は鴉天狗。鴉から変化したんです。鴉としては長生きなんですけど、妖怪としては、まだまだ子供で、妖力があってもうまく使えないんです」

楠は文の言葉で巨人が文を狙っていた理由を改めて理解した。そ

して今後も狙われ続けてしまう可能性があることも。

「でもさつき体を飛ばしたよね。あの時はすごく力強く感じたよ」

「あの時は……眼の前に楠さんの顔が驚いて、感情の高ぶりです。以上の力がでたんです。感情の変化で妖力の強さは変化しますから」

文は恥ずかしそうに頬を染めて、小さく呟くように応えた。

楠はその変化に気づかないで、そうなんだとうなずいただけだった。「うーん能力かわからないけど、覚えてる限りでは、こうやったら葉っぱが舞い上がったよ」

そう言いながら楠は右手を上挙げた。

すると落ち葉や枝が、楠の思ったとおりに舞い上がった。それはふらふらと揺れてはいるが、確かに滞空していた。

楠は巨人との戦いを思い出した。

あの時は巨人の赤い塊を全てはじいていた。自分で当たったからわかるけど、あれはかなりの衝撃をとまっていたけど、それを全て無傷にはじき消したんですよこれ。

楠が物思いにふけっていると、文は興味深げに葉っぱを掴んでる動かそうとした。しかしそれは、左右に一定の距離以上には絶対動こうとはしなかった。

文はむむむ……と唸りながら、葉っぱをにらみつけていた。

小さな少女が浮いている葉っぱをにらみつけている姿は、どこかなごむ光景である。

「たぶんこれが私の能力だとは思うんだよ。一体どういう能力なんだろう」

「むーたぶん『葉や枝を操る程度の能力』だと思いますけど……生意気な葉っぱですね。こうなったら！」

文はどうやっても動かない葉っぱに腹をたてたのか、腕を振り上げて能力を発動させた。

風が巻き上がり、落ち葉や枝が舞い上がり視界を覆い尽くした。さつきまで浮いていた葉っぱも空高く舞い上がったように見えた。文はどうだ！　と言わんばかりに胸をはる。しかし頭に葉っぱを

乗せている姿はひどく子供らしかった。

楠は文の初めて見せた子供らしい行動に微笑んだ。

文は目覚めてすぐには悲しみの表情を見せたが、それをすぐさまに隠すしたりするのは、子供のやることではなかった。

その後も楠と文は、文が質問して、楠が応えるというのを繰り返した。

時に、能力を試したりしながら二人は長い時間を一緒に過ごした。気がつくと高く昇っていた日が木々の隠れ、森の中は大分暗くなっていた。

文はそのことに気づくとどこか悲しそうな表情を浮かべる。

「楠さん、ありがとうございます。こんな時間まで付き合わせてしまつて」

その言葉は楠の予想通りであつた。

日が暮れるにつれて文の表情は徐々に暗くなっていた。楠はすでにそのことに気づいていた。

「まあ落ち着つけ。ここから去るつもりみただけど、どうするの？」

「わかんないですよ。でもここにいるとまた私を狙う妖怪がきますし、私にはもう帰る場所はないです。たぶんもうみんな……」

文は絞り出すように楠は微笑みを向けた。

楠は文が言いたいことを理解しているつもりだ。

ここにいるとまた楠に迷惑がかかると。

そんな文を楠は優しく頭を撫でた。

文は驚いた表情を受けながら楠を見た。

「なら私を頼りな。たぶんだけど私は文より長く妖怪として生きてる。妖力は私のほうが弱いみたいだけど、君を食べようとする下等妖怪くらいなら倒すことはできる」

「でも……」

「それにその羽では逃げることもできないだろう。そんな子供を放つておけるような妖怪じゃないみたいでね私は」

「でもでも……」

文は眼に涙をためながら何かを言おうとするが、それは言葉の途中で途切れてしまう。

「それに私は他の妖怪に絶対襲われない場所を知ってるから」

「えっ？」

小さく呟いた文の手を握り、楠は楠に手を当てた。

「文、眼をつぶって」

「は、はい」

文が眼を力強くつぶるのを見て、楠は小さく微笑む。  
楠も眼をつむる。

この楠は門。その先にあるのはあの世界。

数瞬、瞼ごしに強い光を感じた。それが納まり楠は眼を開けた。  
その先は目覚めた時と一切変わらない明るさの世界があった。

森の広間に鎮座する楠、崩れていない真っ白な鳥居、榊が整然と  
生え揃い道を形成している。

「文、眼を開けても大丈夫だよ」

文は閉じていた眼を開けた。その先に広がる世界を見て信じられないと小さく呟いた。

「ここが絶対襲われることのない世界。私たち二人以外に生きてる  
生き物は、木々だけだよ」

「ここが……」

文の声は世界に吸い込まれるように消えていった。

「あの鳥居の先には絶対行かないでね。真っ白で少しも先が見えなくて、  
ここに帰ってこれなくなるかもしれないから」

たぶん、いや間違いなく戻ってこれなくなる。あそこから先  
はこことはまた異質な世界。

楠の想いは確信に近かった。自分以外があそこに入ると道に迷い  
消滅してしまうという確信だった。

「そ、そうですか」

文は少しおびえたような声で応えた。

「さて文どうする？ 私と一緒に暮さない？ ここには何もなければ外には行く必要があるけど、でもここにいる間は襲われることはない」

「本当にいいのですか？」

「これは私のためでもあるんだよ」

「あなたの？」

「私は記憶がないんだ」

文はその言葉に今日一番の驚いた表情を浮かべ、

「大丈夫なんですか！？」

詰め寄るように問う文に、楠は手を振る。

「大丈夫だよ。記憶がないって言うても なんていったらいいかな。とりあえず生きていくことには問題ないよ」

体が覚えている感覚との齟齬を楠は感じてはいたが、妖怪のことなどは思い出すことができた。思い出せていないのは自分が目覚める前、記憶に蓋がされる前の自分自身の記憶だった。

でも生活に支障をきたすようなことはないし。

楠は自分の記憶に関しては心配はほとんどしてなかった。唯一心配といえるのが戦闘に関する記憶がないこと。巨人との戦闘の記憶も強引に蓋をされ、最後に勝った事実だけの記憶はあったが、その過程の記憶はない。

だがそれも、おいおい思い出すだろうと楠は樂觀視していた。

「まあそれで自分の為っていったけど、それは一人になるのがいやだったんだよね」

「は？」

「私はどうやら寂しがり屋の性格みたいだね。それで一緒にいてくれないだろうか？」

この問いかけは想像の外だったのか、文は表情は完全に固まっていた。

楠の言葉は本音半分嘘半分であった。

記憶をなくして初めて会った知り合いと別れたくないという気持ち

ちと、この少女を留めるためには必要だと思ったからだ。

文は固まっていた表情を徐々に崩し始め、

「あは、あははは」

声に出して笑い出した。

涙を流しながら笑っていた。

「なにその理由？ ダメおかしくておなが、ははは」

「そんなにおかしいかな」

「ははおかしいよ。あゝおかしい。楠さんって以外とおもしろい人ですね」

楠は笑い続ける文を見て首を傾げる。

「私はいたって真面目なだけだな」

「真顔で言うからおかしいんだよ、ふふ」

文は「あゝおかしい」と眼にたまっていた涙をぬぐった。

「それにこんな子供と一緒に暮らそうなんて言うなんて、やっぱり楠さんは変態妖怪ですね」

「そては勘弁してくれないか」

「ダメです。確定事項です。楠さんに拒否権はありません」

文は笑顔を浮かべながら言いきった。

楠は文の笑顔を見て、変態妖怪でもいいかと思っていた。

それだけ文の笑顔は見てる人間も幸せな気分になんてくれる笑顔だった。

「でも私も変わった妖怪みたいです。変態妖怪の楠さんと一緒に住むんですから」

文は右手を楠に向けて伸ばす。その顔には変わらない笑顔があった。

「よろしくお願いします楠さん」

楠はその手を笑顔で掴む。

「よろしくな文。これで私たちは仲間で家族だ」

そう言うと楠は、掴んでいる手とは反対の手で文の頭を少し強めに撫でた。

文は撫でられながら「あややや」と小さく呟き、顔を赤く染めていた。

その日の夜、暗闇の中、広場に鎮座している楠は静かにたたずんでいた。

森の中は、夜に生きるものたちが活発に動く音、騒ぎ立てる喧騒、そのものたちから隠れるように生きるものたちの奏でる音は、外から見た暗闇の森からは想像ができないほどの生活の音であった。

だが、楠が鎮座する広場はそれらの音からは隔絶されたこのように静かだった。

そんな中、木々をかき分けて進む音が広場の中に響く。

「あー疲れた。やっと見つけたよ」

木々をかき分けてきたのは特徴的な帽子をかぶった諏訪子だった。彼女は疲れた表情で森から出てきた。

諏訪子は今日一日をかけてようやくこの楠を見つけたのだった。

諏訪子が座りながら見上げる楠は他の木と比べて圧倒的に大きく離れたところ、特に上空から見ればすぐさま発見できるであろう高さであった。しかし、

なんでこんな大きい楠が飛んできると見えないのさ。

山を越えて見えた森の中には、こんな巨大な木は見えなかったのだ。

異質な気配を肌で感じながらも、この木を発見することを諏訪子は出来なかった。

気配に近づこうとすると、異質な気配が見えない壁のようになって襲いかかってきた。何度か挑戦したが無理だった。神の力で強引に行けそうであったが、森を破壊する可能性が高いので諏訪子はお



となしく森に降りてみた。

森に入るとそこは明らかに異質な世界になっていた。森の中に入ったはずが生き物の気配が全くせず、榊が生い茂り道を作っていた。それを取り越えて進むとすると、眼の前が真っ白になり、本能的に危機を感じて道に戻った。仕方なく道を進むとそこは迷路のように分かれ道だけであつた。

ダメ元で諏訪子は大地に道を聞いてみた。この森に入ってから神の力を封じられていた。それによって飛んで脱出したくて出来な  
いでいた。

すると予想外にも応えが返ってきた。

『ようやく力を山の神としての力を使ったが、まったくすぐに気づけよな山の神としての力は封じられて無いって。今代の山の神は脳無か』

ひどく頭にくる返答であつた。まるで人が妖怪のようだった。

『まあいいや。お前はこの異質な気配の主のどこに行かなくちゃいけない。会わなくちゃ行けないんだ。これは山の神としての使命だ』  
使命とは？ 諏訪子はさらに大地に問いかけた。

『今のお前は知らなくていい。いずれ知ることになる』  
そして大地は目的地までの地図を頭に送つてくると黙ってしまった。

諏訪子は山の神である自分の言うことをまったく聞かない大地を不機嫌そうになんども叩いたが、もちろん反応はなかった。

諏訪子は泣きそうな想いになりながら、目的地向けて歩き始めた。長い時間歩き続けてようやく目的地と思われる個所が見えたと思うと、突然今まで見えていた景色が嘘だったように消えた。

諏訪子は景色は消える瞬間、

『友となつてくれ。決して思い出させるな』

あの大地の声を聞いたような気がした。

「なんだったんだろうねえ。なんか意味深なことを言う大地だったねえ」

さつきまでの異質な空間とは違い、森には生き物たちの気配が充滿しており、上を見上げれば星空が木々の隙間からのぞけた。

諏訪子は自分の体の内から消えていた、神としての力が戻っているのに気づいた。

まるでこれじゃあ。ここに神を近づけたくない　神はここに近寄ってはいけないみたいだね。

生き物と妖怪たちはここに自由に出入りできるみたいだった。広場には妖力の名残があった。諏訪子にはここに神力の名残とともに現在も発せられていることを肌で感じた。

出所は四方に建てられた壊れた鳥居。

そして巨大な楠の根元。

諏訪子は根元の地面を掘り返すと、すでに紙屑となってしまうた札を見つけた。札には封の一字が描かれていた。

諏訪子はそれを見て、ここがどのような場所なのかを理解した。

封印。それもかなり強烈なものだね。

「四方の鳥居。鳥居は神域と現世を隔絶するものだから、鳥居に込められた神力によってこー一体を神籬として現世と隔絶させて、それをこのにて札この楠に宿るものを神籬に閉じ込めたといったところかな。それが鳥居が壊れかけて不完全になってるね」

諏訪子はわざと口に出していた。それはここにはいない誰かに話しかけるように。

「確かに私じゃないとわからないことだねこれは。確かに興味ひかれることだけど、今日はもう疲れたよ。おやすみ」

「巫女さんに怒られるな」　と小さく呟きながら楠に根元で横になると、諏訪子は眼を閉じた。

諏訪子の言葉に反応するように風が吹いていない森の木々が揺れていた。

#### 第四話（後書き）

天狗はせつかくなので射命丸 文さんにしました。

はつきりいったらオリキャラでもよかったのですが、せつかくなので。

しかし口調などなど完全にオリキャラになってますねごめんなさい！  
原作キャラ好きな人ごめんなさい。これからどんどん崩壊する可能性大です。

こんな時間に投稿なので誤字が多いかも……

## 第伍話

楠が眼を覚まし横を見ると、文はいまだに眠りについていた。

昨日はこの世界に入ると、文は安心したようにすぐに眠りに落ちてしまった。

家族が。

楠は昨日自分が言ったことを思い出して苦笑して立ち上がった。

楠が立ち上がり文を見ると、閉じていた瞼が少しだけ開いていた。

「あ、ごめんな。起こしてしまったようだね」

文は上体を起こして半分だけ開いた瞼で辺りを見渡し、そのまま寝ぼけ眼で立ち上がると、楠のほうに寄りかかるように倒れかけてきた。

「おっと」

倒れてきた文を楠が受け止めると、再びを眼を閉じて規則正しい寝息を立て始めてしまった。

楠はそんな文を微笑ましく思う。

大人びてるけどやっぱり子供なんだな。

しばらくの間見ていたいという思いにかられながらも、誘惑に抵抗するように文の体をゆする。

「起きて文。もう朝だ、と思うよ」

森の中は寝る前と一切変わった様子の無い明るさ。

楠には今の時間がわからなかった。

この世界の空は常に白く明るくて、外の世界のように太陽があるかさえもよくわからないのだ。

楠の体内時計では、日の出からだいぶたっているように感じていた。

文は体をゆすられて、ようやく眼を開けた。

「起きた？ 軽いから大丈夫だけど、そろそろ離れてくれると助かるかな」

文は合っていなかった焦点を楠に合わせると何度か瞬きを繰り返して、昨日と同じように口から言葉にならない音を発しながら後ずさった。

その動きに楠は苦笑するしかなかった。

「おはよ文。その動きは少し傷つくな」

「いえいえ、これは楠さんの危ない性癖から」

昨日に引き続きの言葉に、楠の体は自動的に動いた。離れた距離を一息で詰めて、文の頭を軽くはたいた。

「まだそれを言うか」

「アイタ」

文は叩かれた頭を両手を押さえながらも、顔には笑みが浮かんでいた。

楠はそのまま文の頭に手を乗せて、軽く撫でる。

文は気持ちよさそうに眼を細めた。

「まったく。叩かれたのに笑うのはおかしくないか」

「なんかこういう日は久しぶりだなんて」

そうか、と言いながら楠は文の頭をポンポンと叩いた。

「さてと、これからどうしたものかな」

楠は困っていた。彼には記憶がなく、文は妖力の強さ故に狙われる。

ここに居続けるにも、水も何もない。

困った。やっぱり外に出るしかないかな。

楠が首をひねってる横で、文もひねっていた。

「うーんどうしましょうか？」

お互いに妖怪としてはまだまだ駆け出したった。

楠には記憶がなく、妖力もそこまで高くない。

文は妖力が高くもその使い方をわかっていない。その妖力の高さ故に捕食される危険性は昨日襲われたことから決して低くない。

「まずは、服をなんとかしないとねえ」

「あ、それは大丈夫ですよ。私たち妖怪は、着ている服も体の一部

のようなもので、時間が経つと勝手に直るんですよ」　ほら、と言いながら文はその場でくると反転して、背中を向けた

昨日まで破けていた箇所は綺麗に元に戻っていた。背中が焼けてしまった箇所は、飛び出ている黒い羽が見えるだけだった。

羽の毛並みは昨日までとは違い、光沢を持った黒色だった。

「羽の調子はどう？」

「こればかりは長い目で見ないとダメですね」

文の羽は光沢は取り戻していても、折れてしまった箇所は昨日と変わらないでいた。

でも、と文は小さく呟くと眼をつぶって集中し始めた。  
すると文の体が浮き上がった。

昨日のように風をまといて浮かんでいるのではなかった。

文は眼を開けると同時に地面に降り立った。

浮いていた時間はわずかであったが、文の顔には疲労と何かをや  
り遂げた達成感のようなものが表情に出ていた。

「ふう。こんなもんですね」

文は額に浮き出た汗をぬぐった。

楠は茫然とした表情で文を見つめていた。

「……え？　羽なしで飛べるの？」

その言葉に文はあちゃーと顔を押しえた。

「そういえばそうですね。楠さんは記憶がないんですよね。説明  
不足でした」

そう言つて文は、指を立てて話し始めた。

「いいですか妖怪は基本飛べるんですよ。生まれた時から自然と出  
来るようになってるんですよ」

「でも私飛べないよ」

「それは多分記憶を失ってしまったためですよ。簡単に言うと妖力  
を使います」

「つまり能力を使うときとあまり変わらないってことかな？」

楠は文との昨日の会話を思い出していた。

能力とは力あるもの、人の深い畏れから生まれた妖怪たちはほぼ必ず持っている。

能力の強さは、妖怪の強さに比例するわけではないが、戦いにおいての影響はかなりのもの。

そしてその力を発揮するには妖怪の格がわかる妖力の多さ。

これは妖怪だけではなく神も同じである。

神も妖怪と同じ生き物。妖怪は畏れ、神は信仰。どちらも人の思いによって生まれてきたもの。妖怪はそれほどでもないが、神は信仰を失うとすぐに消滅してしまう。

文は楠の疑問に頷いた。

「そのとおりです。どちらも妖怪の本能みたいなものです。ただ飛べると思いながら妖力を使うと飛べたり出来ますよ」

「それじゃあ文の羽は何の意味があるの？」

楠の問いに、よくぞ聞いてくれましたと顔を綻ばせた。

「私の羽はですね、体制を保つと共に、大幅な加速を可能にさせるんですよ！ でもそれに頼りつきりだったから今苦労してるんですけど……」

自信満々だった声は徐々に小さく呟くような声になっていく。

「えっと……元気出して。私もこれから飛ぶ練習するから一緒にやるう。」

きつと羽なしで飛べるようになれば今以上に速く飛べるようになるさ」

「そうですね。そうですね！ ではまず体に妖力をまとわせてください」

そう言っ文は自分の眼をつむって集中し始めた。

楠も体に妖力が体にまとわせるように想像する。すると体は自然と浮き上がった。眼をつむっている文は、楠が浮き上がっているのに気づかなかった。

「まとわせることが出来たら自分が飛ぶ姿を想像してください」

「もう飛べちゃったんだけど」

なるほど。確かに能力と同じだ。特に何かをする必要もなく自然と飛べた。

楠は体を左右に動かして、飛ぶコツを掴もうとした。文は呆然とした表情で呟いた。

「あややや。もうそんな動けるんですか」

「うん。体は覚えてたみたい。それに体が軽い」

「それは昨日より妖力が増えてるからです。というか増えすぎですよ！」

楠は文の言葉は半分も耳に届いていなかった。

広場の中を飛び回り、己の体の調子確かめていた。

はは、体が軽い。

空を飛ぶのは妖怪として常識。

だが記憶を失っていた楠にとっては真新しい感覚だった。しばらくの間その場に滞空していると、文がゆっくりと楠の横まで昇ってきた。

「やっぱり羽がないと速く飛べないですねえ。羽なしでも速く飛べるように練習しなきゃダメですね」

昇ってきた文は、楠の肩に手について疲れを表すかのようにため息をついた。「お疲れ文。確かにこれは能力みたいなものだね」

「普通はそこまで妖力出しませんよ」「そこまで出てる？ 私としてはあんまり出してないと思うんだけど」

「たぶんですけど、急に強くなった妖力がうまく調整できないんだと思います」楠はそうか、と呟くと上を見上げた。

見上げた先にあるのは巨大な楠くすのきが雄大に葉を広げていた。それは空に蓋をするように広がっている。

ほんとでかいなあ。こうやって飛び上がっているのに頂点が見えない。

「でかいですね」

同じ様に上を見上げていた文は呟いた。その顔には少し怯えが浮かんでいた。



「楠さん。白い靄の先が見えますか？」

「いや見えないよ。あれはあの鳥居の先も同じ様になってるよ」

楠が指さした先の鳥居の先に広がる道の奥には、空と同じ白が見える。

楠は文の手を握りながら、鳥居の上端に降り立った。

そこから見える景色を見て文の顔には、浮かんでいた怯えに、持ち前の好奇心が強く表れていた。「どうする？ 先に言ってみる」

「うつつ、妖怪の本能が先に行くと言ってるのですが、私の魂は先に行ってみたいと叫んでるのですよ」

「決めるのは文だよ。でも私はあまりおすすめしないよ」

「どうしてですか？」

「目覚めた時に一度入ってみたんだけど、何もなかった」

「何も、ですか？」

「そう何も。まずは榊が生い茂って道が複雑に絡み合って、迷路になってる。そしてその先には白い世界。」

なんにもない世界。

現世に生きる、神も妖怪も人間もない世界。

そんな世界か広がってる」

楠の声に感情が一切こもっていなかった。

鳥居の先を見続けているその眼には、何も写っていない空っぽな視線。

「楠さん？ 大丈夫ですか」

楠の横顔を見て異変を感じた文が声をかけた。

「ん？ 何が？」

「いえ……何でもないです。その先には何かあるんですか？」

「反対側に通じてるよ。ここは反対側の鳥居から出てきたから。どうする行く？」「ええ、行きますとも！ この不思議空間なんですから、やはり自分の眼で見てみないことには信じられないですよ」

文の不思議空間という言葉に楠は同感した。  
彼も疑問に感じている点はいくつもあるのだ。

何故こんなに木々が生い茂っているのに生き物がいないのか。

鳥居に広がる空間は何なのか。

何故自分はここで眠っていたのか。

楠の内心にはいくつもの疑問が漂っていた。

「わかった。それじゃあ行こう。見通しが悪いから手を繋ぐよ。はぐれたら帰ってこれないかもしれない」楠は文の小さな手を握る。

文も楠の手を握り返すと、二人は浮かび上がった。

道に添いながらふわふわと二人進んだ。

進む先は楠が始めてきた時と変わらず、白い靄に包まれて先が見えない。

文は次第に顔に浮かんでいた好奇心は消えて、道の先に見える白い靄を不気味そうに見ていた。

楠が掴んでいる文の手が細かく震え始めている。

楠はその手を強く掴んだ。

「大丈夫、文？」

「はい大丈夫です。後少し強く手を握りすぎです。痛いのですが」

文の言葉が強がりだと楠はわかっていた。だから楠は強く掴んだ手を離さない。そのままの二人は手を繋いだまま、何もない白い世界との境目までやってきた。

境目に降り立ち、その先を見つめる。しかしそこから先はただ白い靄が漂い続け、奥を見通すことはできない。

二人は黙ったままその世界を見つめていた。文は体を震わし、顔も少しづつ青ざめていた。

「文、戻る？」

楠の問いかけに文は悩まずに頷いた。そして文が一步下がった瞬間。

「え、え、何？」

境目の向こうから白い靄が伸びてきて文の体を包み込もうとした。文は突然起きた出来事に反応できないでいる。

白い靄は徐々に文の体を薄めているように見えた。それを見た楠は咄嗟に叫んだ。

「文！ 能力を使いえ！」

楠の声に意識を取り戻した文は、自分の体を中心に風を巻き起こす。その風によって白い靄は散り散りになり消えていった。

楠は文を抱き寄せて、飛び上がった。しかし白い靄は再び文を飲み込もうと、靄を伸ばしてくる。

来るな！

楠は白い靄目がけて念じた。それは能力を使うように自然な動きであった。靄に対して右手を伸ばして再び念じる。

来るな。彼女は迷いしものではない。

白い靄は楠の思いを感じ取ったのか、そのまま霧散して消えていった。

数瞬の間、楠はそのままの体勢のまま固まってしまった。しかしすぐに抱き寄せた文の様子を見た。

文は楠の胸に顔を押し付けて震えていた。体に異常は少し見たあるようには見なかった。

楠は小さく彼女の頭を撫で、来た道を戻り始めた。戻る最中、楠は先ほどの出来事を思い出していた。

なんだったんだ今のは？ 俺が来た時はあんなこと起きなかったのに。

白い靄は確実に文だけを狙っていた。握っていた手だけを避けるように白い靄が彼女を包み込んでいた。

そこまで思っ、ふと後振り返った。白い靄が追ってきてはいないかと思っただ。

すでにあの場所からは遠く離れており、うつすらとしか見えなかった。

白い世界はただそこで漂っているだけだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0166m/>

---

東方神隠し

2010年12月25日21時36分発行